

『毛沢東盲従の末路—「連合赤軍」事件の根源をつく』

日本共産党中央委員会出版局発行（1972/05/01）

（「赤旗」1972年3月26日～4月8日）

「連合赤軍」を名のる殺人集団がひきおこした事件の“全貌”や“背景”や“真相”が、マスコミではすでにとりあげられています。微に入り細をうがったこれらの報道や論評によって、あの事件の本質がはたして解明しつくされているでしょうか。以下、事件の中心点をおさえながら、その本質をうきぼりにしてみましょう。

目次

1. 「連合赤軍」のナゾ——解明のカギは盲従の究明
2. 自首までの足どり——「根拠地」での凋落ぶり
3. 周波数1040kc——深夜、海のかなたから扇動
4. 紅衛兵と瓜二つ——“革命”の名で殺人を合理化
5. 盲従教授——毛沢東を「大指導者」と崇拝
6. 福田正義一派——大量リンチ殺人の責任を他派にする
7. 西沢隆二一派——いまは責任のがれの沈黙
8. 毛沢東思想学院——“学習道場”から暴力実践へ
9. 日中脱走派——文章まで北京の口うつし
10. 「京浜安保共闘」——雑多な狂信分子が野合
11. 「赤軍派」——ハイジャックを周恩来にほめられ、感激
12. 資金のナゾ——カギは中国盲従商社
13. うごめく残党——動揺、そして開き直る
14. 共産党は糾弾する——根本の「毛沢東思想」にメス

1 「連合赤軍のナゾ」——解明のカギは盲従の究明

警察当局の小細工と演出

「あさま山荘」事件では、警察庁はベテランの広報担当者を現地に派遣しました。「突撃」の前日には、突撃計画のすべてを報道陣に発表しました。死体発掘では、前夜一度掘り出した死体をもう一度埋めて、翌朝記者席までこしらえ、発掘状況をカラー写真で撮影させました。

そのごの逮捕者の自供、自首した山本保子（二八）につづいて、保子のこどもさがし、中村愛子（二二）の自首、前沢虎義（二四）や岩田平治（二一）の自首など、逃亡者の自首の発表もタイムリーにおこなわれ、死体発掘ニュースのあい間、連日紙面から消えることなく続いています。だが、だれにも不審な、これら自首した連中の逃亡後の足どりになるとまったく不明。ただ残虐なリンチの実態がくりかえし流されるだけ。かれら凶悪犯を一カ月近くかくまってきた黒幕の正体はなにひとつ明らかにされていません。

もちろん犯人らは留置場のなかにいるわけですから、捜査当局以外は、かれらの自供がどの程度にすすんでいるかは、知ることは不可能です。テレビも新聞も週刊誌も、捜査当局の発表にたよるほかありません。ここに当局の情報コントロールが働く余地が生まれます。ベテランの広報担当者から流される発表、情報にはもちろんつじつまのあうように小細工がおこなわれ、演出されています。だが小細工はかならず破たんするものです。

森、永田みのかしの不思議

「連合赤軍」の“最高指揮者”森恒夫（二七）と永田洋子（二七）の逮捕当時、群馬県警は、かれらは悪臭にみちて「永田をつかまえた逮捕の瞬間は夢中だった捜査員も一息いれると思わず両わきからかか

えていた腕をはなしそうになった」(「朝日新聞」二月十九日付)「身なりはこじきみたい……。くさくて、くさくて。しばらく悪臭が車内に残るので迷惑した」(「毎日新聞」同日付)と発表しています。ところが、三月二十三日付毎日新聞では、群馬県警の発表として「森、永田は二月四日から上京し、十六日に松井田署員の職務質問を受け、東京渋谷のテレビタレントT夫婦と名乗ったので、同署員が警視庁に間合わせ、T夫妻の存在を確認したので釈放した。森と永田が逮捕された翌日、三百八十九万円の大金を所持していたのは、東京のアジトに預けてあった資金をとりに行ったのではないか」というのです。

各駅頭に人相書がまわり「チビで色黒、出っ歯でギョロ目」と特徴の多い永田をつれた森が十日間も東京方面のアジトにいたのを逮捕できないほど日本の警察はのんびりしていたのでしょうか。

また十六日に森、永田らを張込んでいた刑事が、職務質問をしていながら異様な臭気を放っていたはずの二人を、東京からきたテレビタレント夫妻と信じ、間合わせをうけた警視庁も疑わなかったというのですから、これもおかしい話です。

虐殺された加藤能敬(二二)は中村愛子といっしょに昨年十一月二十一日、府中市是政の川島陽子(二七)の爆弾アジトで、爆発物不法所持の現行犯で逮捕された経歴をもっていますが、どういうわけかそろってすぐ保釈されました。そして山岳アジトに参加、加藤は“小嶋和子(二二)と肉体関係をもった”という理由で、実弟二人も加わってなぶり殺しにあったのです。

このほか転々とアジトをかえて真岡で奪った猟銃をもち歩き、爆弾製造や訓練にはげんできたかれらの資金源もナゾの一つ。赤軍派が銀行強盗で奪った金が一千万円、約五百万円は逮捕時に押収されていますから、五百万円で一年近いあれだけ多くの連中の逃避行ができるはずはありません。

発表されない毛盲従のこと

だが最大のナゾは、いま洪水のように流されている報道の渦のなかで、「連合赤軍」の背後に浮かんでは消える毛沢東盲従のことがほとんど発表されていないこと。

かれらのアジトから大量に中国製のカンヅメや毛沢東選集、毛沢東語録が発見されたというニュースは、新聞の片すみに小さく報道されただけで、かれらがそれをどこからどういう経路で入手し、運びこんだか、いろんな疑惑はいっさい解明されていません。

なにかといえば事件の「思想的背景」に力を入れる治安当局が、中国の「文化大革命」で紅衛兵がおこなった人民裁判さながらの蛮行を目の前にしながら、毛沢東語録にはまったく関心をしめさないのは、奇怪しごとといわなければなりません。

2 自首までの足どり——行きつく先は“毛思想”

歯切れの悪い警察の態度

山本保子。二十八歳。「連合赤軍」“兵士”。三月十日、愛知県・中村署に自首して逮捕(森林法違反)され、いまは殺人、死体遺棄、保護者遺棄などの罪も加わり、群馬県警で取り調べを受けています。夫順一(二八)のリンチ殺人に加わり、二月六日、生後二カ月足らずのわが子を迦葉山アジトに置き去りにしたまま、いのちからがら逃げ出した保子は逮捕までの二十二日間、どこへかくまわれていたのか——。取り調べが始まって二週間以上になるのに多くのナゾに包まれています。

いままで警察の発表などで明らかになっているのは——。「時計を落とした」と仲間をだまして雪の林道をかけおりた保子は、近くのスキー場からタクシーに乗り、沼田駅へ行き、近くの洋品店で買った衣服に着替えて六日夜、東京・上野駅へ。金は一万余円かくし持っていました。上野の旅館へ一泊した保子は七日早朝に東海道線で自分たちが住んでいた名古屋市へ向かい、その足で小牧市北外山二七三〇、県営住宅、伊神邦彦(三六)のもとへ。「夫婦げんかをし、こどもは実家へ置いて来た」と十四日までかくまわれていました。そして十日間の空白をおいて二十五日から三月十日、自首するまで名古屋市中村区二ツ橋三丁目、天理教布教師、五藤秀雄さん(六一)が友人から頼まれ、五藤さんの長女のつぎ先の岐阜県揖斐郡池田町、料理店手伝い、宮沢吉明さん(四二)宅に身を寄せていました。この間、保子は「水野」と名乗り、「暴力団の極道のおやじから逃げている」と五藤さん、宮沢さんらをだまし続けていました。

この間のことを群馬県警に聞くと「伊神？知りませんな。本人（保子）がいいたがらないのでね」というだけ。そういいながら「ナゾの十日間などわかっているが捜査中のことなので発表できない」ともいう歯切れの悪さ。愛知県警の平松警備課次長も「伊神のところへ一週間いたが、伊神と一緒にいたのは二日だけ。伊神はそのあと大阪へ出張していた」といい、「伊神から事情を聞いたが、大阪のどこへ行ったかわからない。そのあと宮沢さんのところへ行くまでの十日間もわからない」といった調子。

ところが、この伊神や山本夫婦がこれまで何をしてきたかを調べていくうちに、今回の事件のナゾを解く糸口になる、さまざまな疑問につき当たりました。まず伊神という男。中国育ち。四十年帰国。四十二年夏、名古屋市内の日中貿易の盲従商社「協和交易」へ就職。すでに同社に三十六年からつとめていた保子と親しくなりました。

『毛沢東盲従強要業』に専念

一方、夫の順一は四十一年四月、北九州大中国語科を卒業と同時に名古屋市中区丸の内二の一三、日中貿易盲従商社「華潤」へ同社専務で反党盲従分子の徳井貞雄の紹介で入社。四十一年秋、名古屋市で開かれた中国経済貿易展で、伊神や保子と“毛沢東思想”ですっかり意気投合し、盲従への道をまっしぐらにすすみました。四十二年、東京の善隣学生会館にあった日中友好協会本部へのなぐりこみ事件では、順一が先頭に立って暴力をふるったことは、すでに「赤旗」（三月十一日または十二日付）で報道したとおりです。

順一や伊神らは、こうして仕事はそっちのけで、各貿易商社をまわって“毛沢東盲従強要業”に専念。そのため伊神は、同じ盲従分子の協和交易社長村井瀬一とも意見が対立、けんかわかれをして、保子とともに、名古屋市東区富士塚町二の一に、四十五年八月、「アイカ商事」の看板を出しました。元喫茶店の一部を改造したこの事務所は看板だけ。実際は中国民芸品をブローカーから仕入れて、伊神と保子が車で団地などを売り歩く“行商”です。このころ保子と結婚した順一も、この行商を時どき手伝っていました。しかしこれがすべてかどうか。この三人が裏でなにをしていたかは、まださだかになっていません。

「われわれ（“京浜安保”）は毛沢東主義にのっとりた一国革命。無原則な統一はできない」——昨年十一月、「連合赤軍」誕生のさいヒステリックに叫んだ永田洋子（二七）。

「やるべきは武装ほう起だ。そのためにはこっち（“赤軍”）が毛沢東主義に路線変更してもよい」と永田に同調した森恒夫（二七）。永田は留置先の高崎署で「四十年にML派が分裂したとき、毛沢東思想に関心をもち、傾倒した」と自供。兄が大阪で日中商社に勤めている森もアジトでつねに中国行きを熱望していたといえます。

北京放送に聞きいり

横浜国大生の吉野雅邦（二三）は、学内で毛沢東語録売りに精を出していました。加藤三兄弟の二男倫敦（一九）も四十六年夏、家をとびだす前に北京放送に聞きいり『毛沢東語録』、『ゲリラ戦教程』を持っているのを父親にみつきり、しかられています。

このように「連合赤軍」一味を洗えば、きまって行きつく先は“毛沢東思想”。逃走から自首までの一か月余の足どりが不明なままの中村愛子（二二）についても同様です。

だがこうした“毛沢東盲従”にふれる部分は、警察も報道機関もなぜか口をつぐんでいます。この盲点をつくことが、事件の真相を解明する上で、いまいちばん重要といえましょう。

3 周波数 1 0 4 0 k c —— 深夜、海のかなたから扇動

人気番組と紙一重の周波数

能敬（二二）＝リンチで死亡＝、倫敦（一九）、元久（一六）＝いずれも「あさま山荘」で逮捕＝三兄弟の父「加藤益男さんは、事件後に書いた手記のなかで「下のこどもたちが、兄の影響を受けているのを知ったのは今年の春ごろからだ。深夜、中国の海外向け放送を聞いているのをみて、激しくおこったこともある……」とのべています。

その「中国の海外向け放送」＝「北京放送」は、高校生の手紙などを取りいれた人気番組「ABCヤング

リクエスト」(一〇一〇キロサイクル)と目盛りの針一幅ちがうだけの一〇四〇キロサイクルで毎夜、強力な電波で日本語の放送をつづけています。

「こちらは、ペキンホーソーキョクです。日本の同志のみなさん。友人のみなさん。毛主席の語録をお送りします……」こんな調子で毛語録にはじまり、毛語録に終わる放送。加藤兄弟らも『毛沢東語録』や『ゲリラ戦教程』をかたわらにおき、深夜ラジオにかじりついてこの放送に聞き入っていたのです。加藤益男さんがそれに気づいたのは「去年の春ごろ」といいますが、加藤兄弟らはそれ以前からも聞いていたでしょう。いったい北京放送の内容はどんなものだったのでしょうか。

トロツキスト賛美の数かず

七〇年の十月二十一日、二十三日の北京放送は「佐藤訪米阻止」をかけた、「革マル」「全共闘」などのトロツキスト暴力集団が東京の青山通りなどで、駐車中の車十数台を焼きはらい、路上にバリケードを築いてあばれまわったのを「機動隊との激しい肉弾戦」「日本人民の英雄的な闘争」と手放しで賛美していました。

なおその数日前の十八日の放送では、京都の相田某という“進歩的青年”が「敢然と大学を中退して毛沢東思想を活学活用した経験を紹介する」とのべ、かんだかい扇動的な口調で「宮本集団(注・日本共産党のこと)のまきちらしている議会主義の幻想をあますところなく批判し、毛主席の『鉄砲から国家権力が生まれる』という教えがまったく正しい真理であり、日本革命もかならず鉄砲にたよって成功させることができるということをつかんだのでした」などと放送しました。

訪中団を通じ「毛思想」強要

毛沢東一派のトロツキスト暴力集団への支持、激励は、北京放送だけでなく、「人民日報」はじめ多くの出版物でもくりかえされてきました。そればかりではありません。“人事交流”を名目に、訪日した中国の代表団や、日本の毛沢東盲従集団が送りだした訪中団を通じて、直接、毛沢東思想の強要がおこなわれています。

中国で例の紅衛兵が「毎日毛沢東思想を身につけさせ人民戦争の理論を身につけさせ、反帝、反修の火薬のにおいのするものでなければならない」(六六年の壁新聞)とさけば、訪中団を送り出す日本の毛盲従集団も「プロレタリア文化大革命に対する理解を深め……帰国後は……文化大革命の意義と内容を日本の各界各層の婦人に紹介し、友好運動を発展させる」(一九六七年、日本訪中婦人代表団派遣要綱)といったぐあいです。

この目的にそって、訪中団は「旅行中、一日五回も毛主席語録宣伝隊の“だしもの”にぶつかる」(毛沢東に盲従して日中友好協会から分裂、脱走した連中の機関紙「日本と中国」六七年一月十六日付)ほど“教育”されて帰国しています。

「一日入隊」で鉄砲を訓練

果実友好代表団の一員として訪中した果実商のYさんは「参加しないと“反中国”といわれて商売にさしつかえるので行ったのですが、いやはやひどいもんでした。目的の果実栽培はみせてもらえず、一日中、学習と語録の暗唱ばかり。民兵の軍事訓練もみせられましてね。鉄砲をうたせてもらった人もいます。こうした風潮が“連合赤軍”みたいなのを生み出したんですよ」と語っています。

日本からの訪中団にはかならずといってよいほど、人民解放軍や民兵訓練、戦跡を参観する“軍事コース”がふくまれています。

六七年秋「若い婦人代表団」の一員として訪中した木村喜代子という女性は、北京郊外の人民解放軍“一日入隊”で「武器を握る勇気をもたなくてはならないということを痛感した」と、とくとくと書いています。「わたしたちも生まれてはじめて銃を手に入れました。握り方さえもわからないのですが、みんなとびつくようにして射撃台のところに行っていました。……二発目からは心も落ちついて射つことができました。参観者がくるたびに実弾演習し、射撃させたらタマがとてもムダではありませんかといいますが、師団長はニコニコして『そう思うのはあなたが銃というものに理解を示しはじめた証拠です』といい……語録の贈物をし

ますと八六ページの一段を読んでもくれました」(「日本と中国」一九六七年十二月十一日付)

毛語録の「八六ページの一段」には「共産党員の一人ひとは“鉄砲から政権が生まれる”という真理を理解すべきである」とあります。「鉄砲から政権が生まれる」は、いうまでもなく、「連合赤軍」が金科玉条としている文句です。

こうした海の向こうからの電波、新聞、出版物、“人事交流”などによる鼓舞、激励、露骨きわまる干渉と、それに忠誠を誓う毛沢東盲従集団の扇動、教唆が加藤兄弟を育て、「連合赤軍」を生みだし、自滅へとかりたてていったのです。

4 紅衛兵と瓜二つ——“革命”の名で殺人を合理化

「連合赤軍」がまねたもの……

「(連合)赤軍派の考え方は、中国共産党の毛沢東主席の考え方と同じだという人がいるが、か弱い女性を人質に取ったり、仲間を虫ケラのように殺したり——そんなことを毛主席がしただろうか」

これは十七日付毎日新聞にのった投書の一つ。「毛沢東思想」をかかげた「連合赤軍」一味の蛮行は大きな反響をよび、各新聞には投書が殺到。そのほとんどが怒りをぶちまけたものですが、なかにはかつての毛沢東と中国共産党が指導して中国人民がかちとった中国革命への記憶から、こうした疑問をいただく人もいます。

しかし、数年前の中国の「文化大革命」で毛沢東の指揮のもとに紅衛兵がおこなったあの残虐な蛮行、狂信的な大殺りくを思いおこせば、「連合赤軍」一味がなにをマネたかは一目りよう然です。

紅衛兵が「文化大革命」のチャンピオンとして出現したのは一九六六年。「全国から孫悟空を輩出させ、天宮に攻め入る」ことをよびかけた毛沢東の大本営で、たちまち全中国に、学業を放棄し、武器をとって紅衛兵組織に参加した青少年がみちあふれました。

当時、中国全土で、「あさま山荘」銃撃戦に加わった加藤兄弟のような少年たちが、「毛沢東思想の小勇将」とおだてられ、毛沢東語録をふりかざして、乱暴のかぎりをつくしました。それまでの行政機関の指導者や共産党組織の幹部のほとんどが「妖怪変化」の「実権派」とされ、毛沢東思想に忠実でないという紅衛兵の一方的判断だけで、つるしあげ、リンチの対象にされました。

幹部を人民裁判で公開処刑

毛沢東は「文化大革命」の名のもとで紅衛兵を使って、中国共産党を破壊し、中国の党と政府に毛沢東の専制支配を確立することをねらったのです。

一九六七年一月の日本の各新聞は北京市長彭真(共産党中央委員会政治局員)、党中央宣伝部長陸定一、人民解放軍参謀総長羅瑞卿、人民日報編集長・新華社社長呉冷西ら二十人が人民裁判という名の公開処刑でさらしものにされた写真を大きく掲載しました。数十年間、毛沢東とともに中国共産党員として革命のためにつくし、建国後十数年を党や国家の要職にあった指導者が、孫のような少年紅衛兵に、えり首をつかまれ、うしろ手にされて、いわゆる“ジェット機式”にひきたてられ、なぶりものにされた写真は、総選挙のさなかに、自民党の反共宣伝に最大限に利用されました。このリンチのあまりのひどさに羅瑞卿は三度も自殺をはかったほどです。

また日本でも紹介され愛読された小説『紅岩』の作家、羅広斌も紅衛兵に虐殺されました。紅衛兵たちは『紅岩』を修正主義小説と称し、作者を「アメリカと蒋介石のスパイ」にしたあげたのです。党の最高幹部や著名な文化人にたいしてさえ、こうした中世紀的残虐なリンチがくりかえされたのですから、一般人民のあいだではもっと激しいリンチや武闘がくりかえされ、罪もない人びとが多数生命をおとしました。

党内で民主的討議を封殺し、自分に反対するものに肉体的暴力を加えたり、党内で一人の人物を神格化したりするようなことは、科学的社会主義とはまったく縁がありません。

毛沢東一派はそれだけでなく、自分のいいなりにならない日本共産党を破壊しようと、乱暴な攻撃、干渉をつづけてきました。

『毛理論』の行きつくところ

こうした毛沢東一派の主張や行動にたいして、日本共産党は、科学的社会主義の立場に反する極「左」日和見主義路線であると、一貫して批判してきました。

当時の紅衛兵の残虐行為がどんなにひどかったか、そのころ武漢市に張り出された紅衛兵の「大字報」（壁新聞）が生なましく伝えています。

「湖北省の全県市で三百余の革命大衆組織が“反革命”とされる。逮捕者一万余人。暗殺三百余人」（一九六七年二月から四月中旬まで）

「武漢市で発生した武闘百二十余回。死傷ゆくえ不明七百余……」（同四月二十九日から六月三日まで）

「造反有理（むほんには道理がある）」「革命とは暴力である」「一がわかれて二になる」などという「毛理論」の行きついたところは紅衛兵同士の武闘、殺し合いでした。しかもそれが「文化大革命」の名で合理化されたのです。

仲間をつぎつぎに虐殺した人民裁判の指揮者森恒夫は前橋地裁に出した「上申書」のなかで「敵権力に対する銃を軸とした殲滅戦以前に、われわれ自身に死にもの狂いの闘争を要求していった……」となんの反省もしめさず殺人を“革命”の名で合理化しています。

この「上申書」は「毛沢東思想」に心酔し、「文化大革命」で“活躍”した紅衛兵にまねた毛沢東盲従、暴力集団の許しがたい体質の証明書となっています。「連合赤軍」は毛沢東思想の産物といえないなどという見解は、事実にも反した正しくないものです。

5 盲従教授——毛沢東を「大指導者」と崇拝

鉄パイプふりかざし襲う

「連合赤軍」を名のる毛沢東盲従の暴力集団を支持、育成し、激励、扇動してきたものは、中国の大国主義的干渉者だけではありません。日本の国内で、みずから毛沢東思想に盲従した徒党、個人が、職場、居住、あるいは学園で青少年を破滅の道にかりたててきました。

たとえば「連合赤軍」の榛名アジトで“総括”という名のリンチで虐殺されたかれらの一味の一人、加藤能敬（二二）が在籍していた東京・町田の和光大学。ここには毛沢東盲従集団に加わって共産党攻撃に血道をあげてきた宮川寅雄（芸術学科長）を中心とする盲従教授の一団がいます。

宮川寅雄は、毛沢東を「大指導者」とあがめ、数え切れないほどの死傷者をだした「文化大革命」を「世界史を新しくひらいた」ものと賛美してきました。それだけでなく、かれは、「日中文化交流協会常任理事」の肩書きで「反米帝・日ソ修正主義とのたたかひの先頭に立っている」とトロツキストや盲従暴力分子をもちあげ、けしかけてきたのです。こうしたたぐいの言辞は公然と発表されたものだけでも、少ない数ではありません。かれが日常若い学生たちに何を吹きこんできたか、見当がつこうというものです。

二月九日のこと、この宮川らに育成された「新中国研究会」「日中正統」などの盲従学生と「ブンド」などのトロツキストの“連合軍”約三十人が鉄パイプをふりかざして同大学生生活協同組合を襲撃。理事選挙の投票箱や会計報告を奪いさり、理事のTさんの顔面を鉄パイプでなぐりつけ負傷させました。自分たちの思いのままにならぬ総代会の成功を妨害するためになぐりこんだのです。

延々八時間のリンチ加える

これまでもこうした暴力事件はいちいち数えきれないほど。ここでも早稲田大学、法政大学などと同様に、暴力集団に反対する自治会活動家の約十人の学生が一年半にわたって登校できないでいます。

かれらが暴力支配をむきだしにしたのは、一九六九年の高校移転問題をめぐって、学校と自治会が妥結したとりきめの粉碎をさけんでバリケード封鎖したところからですが、このとき学内には“紅衛兵運動”さながらの「自治会粉碎」などと大書された「大字報」（壁新聞）がベタベタはり出されました。このなかで自治会執行委員の森居利昭君（当時二十歳）にたいする集団リンチ事件が発生しました。

同年三月三日、毛沢東盲従の暴力集団数人が生協にいた森居君をバリケードのなかにつれこみ延々八時間のリンチを加え、ひん死の重傷を負わせたのです。森居君は当時をふりかえりながら「全身を鉄

パイプでなぐり、シャツ一枚にして、背と腹に氷を入れ、扇風機を吹きつけた。ぬれたタオルを顔におしつけられ、数回失神した。ボリュームを最大にした拡声機を耳につけられ、コマクを破られた。なかには『性的不能者にしろ』と叫んだやつもいた……』と怒りにふるえて語っています。

事件を知った森居君の母、愛子さんが大学に問いあわせると、バリケード内にはいれるただ一人の教授宮川が「心配ない、眠っている」と返事してきました。母親の直感で、気絶していると思った愛子さんが「警察をよぶ」と抗議すると、再度宮川がバリケードの中にはいった直後、森居君は外にほうりだされたのです。愛子さんは「もしあれが『妙義山』だったら連絡もつかず、あの子は殺されていたでしょう……」と語っていました。

バリケードにはいれる教授

「バリケード内にはいれるただ一人の教授」というのも偶然ではありません。同大三年生のS君は「あの当時、暴力集団が封鎖していた研究室三階、とくに宮川の部屋などには、静岡大、大阪市大などの暴力学生約百人が寝起きし、教授では宮川だけが中にはいった」といっています。またそのバリケードには「殺された加藤能敬もはいていた」という同級生の証言もあります。かれはその直後に姿をくらましたが、何度か学内に現われ「京浜安保共闘」の集会を開いたこともあるといえます。

事件後森居君は、犯人の安斎慎治（反党盲従分子安斎庫治のむすこで宮川が保証人）ら五人を告訴しました。公判がはじまると、宮川は暴力集団とともに傍聴、被告らを激励。犯人らが保釈のさいは、合計百万円近い保釈金を出したといわれます。また昨年二月の第十二回公判には宮川自身が証人に立ち、暴力集団が「学問的、社会的に問題提起したことに敬意を表する。大学に疑問をもつりっぱな学生である」とのべています。

こうした盲従教授は宮川らだけではありません。関西大、同志社大など学園の暴力支配がつづいている関西一円を歩きまわり、「全共闘の諸君は日本における文化革命の端緒をきりひらいた」と扇動してきた京大の井上清や花園大の小野信爾、さらには羽仁五郎ら一部文化人もその同類として、つよくその責任を追及しなければなりません。

6 福田正義一派——大量リンチ殺人の責任を他派にする

苦しい弁解をつづける

吉野雅邦の自供で三月二十五日、さらに二人のリンチ死体が発掘されました。この二人は、「京浜安保共闘」が「赤軍派」と合同する以前の昨年八月に「脱落者」として「総括」されたもの。十四人もの大量リンチ殺人の先鞭をつけたのは、根っからの毛沢東盲従集団「京浜安保共闘」でした。

この「京浜安保」の上部組織は共産党を詐称する毛沢東盲従集団。ところがかれらにもっとも密接な影響をあたえてきた同じ毛沢東盲従の山口県を本拠にした福田正義一派は、いま必死になって「自分たちは『連合赤軍』とは関係ない」「『京浜安保』が『革命左派』を名乗り、『毛沢東思想万歳』のスローガンをかかげることを禁じることはできない」などと苦しい弁解をつづけてきました。しかも最近では「『連合赤軍』事件の結末は、『諸潮流』（福田一派以外の毛沢東盲従諸集団のこと）の必然的な帰結」「その最終的な破産を立証」（かれらの機関紙「人民の星」三月十八日付）といいだし、責任をいっさい他の盲従集団になすりつけようと躍起になっています。

もともと、西沢隆二、大塚有章、安斎庫治らのひきいる一人一党的な盲従諸分派と福田一派とは、たがいにいがみあいながらも、毛沢東思想盲従、反日本共産党では同種同根です。

福田一派が主人とおおぐ毛沢東一派自身が「日本共産党（左派）その他の革命的左派の同志の人びと」（中華人民共和国成立二十二周年祝賀宴会での中日備忘録貿易東京弁事処主席代表趙自瑞のあいさつ）と、福田一派とその他の盲従集団を同列に扱っているのです。福田一派だけは例外というわけにはいきません。

紅衛兵仕込みの武闘の歌々

「てめえら死の総括だ」「暴力革命に反対するのか」——さる十五日、東京で開かれた沖縄協定批准書

交換抗議集会の会場で日本共産党への中傷ビラをまいていた福田一派は、その受取りを拒否した労働者や学生に、こう叫びながらなぐりかかり「連合赤軍」そこのけの暴力集団ぶりをさらけだしました。

リンチ、武闘は福田一派のお家芸。「連合赤軍」一味と無関係どころか大あります。「連合赤軍」一味のリンチ殺人は紅衛兵のさるまねでしたが、福田一派の武闘は本場の紅衛兵仕込みです。

北京空港事件（一九六七年八月）のとき、中国人紅衛兵に指揮され日本共産党の北京駐在代表砂間一良（現幹部会委委員）、「赤旗」特派員紺野純一（現編集局次長）両氏にたいして一昼夜にわたる集団テロを加えたのは、ほかならぬ福田一派の弘中朗夫、福田槐二（福田正義の息子）、板倉澄子、日笠世志久らでした。弘中らは数千人の紅衛兵とともに両氏を「闘争大会場」につれだし、「革命は暴力だ」「このやろう」「ぶちころせ」と叫びながら、「ジェット機式」につかまれ無抵抗の両氏になぐる、ける、ふみつけるなど残虐なテロを一晩中つづけ、ともにひん死の重傷を負わせました。

日本国内でも福田一派は日本共産党員や民青同盟員に集団テロを加え、東京・文京区の善隣学生会館にあった日中友好協会本部襲撃事件（一九六七年二月～三月）では、トロツキスト「ML派」と手を結び、本部役員らに重傷を負わせています。

‘後輩’の大量殺人に仰天

「人民戦争万能」論の直輸入でも、福田一派は「連合赤軍」一味の先輩格。

「日本における人民戦争の具体的形態を、実践活動のなかで系統的に追求」（『革命戦士』4号）してきた福田一派が、“武装闘争にめざめた実践者”として目をつけたのがトロツキスト暴力集団。暴力学生の妄動を「人民に暴力についての関心をよびおこした」（同19号）ともちあげ、「かれら（トロツキスト暴力集団）が毛沢東思想で武装されるよう、力の限り援助することがわれわれの責任」（同）とさえいつてきました。福田一派につながる「日中協会（正統）本部」（脱走派）の宮崎世民、三好一らは、東大安田講堂にたてこもった「全共闘」のトロツキスト暴力集団にたいして資金援助までしました。

トロツキスト暴力集団（赤軍派）と毛沢東盲従集団（京浜安保共闘）の結合＝「連合赤軍」の誕生は、こうした福田一派の活動の“成果”ともいえるもの。それだけに、機関紙で『連合赤軍』とは無関係とあわせて弁解し意思統一をはかろうとしたものの、職場に散在する福田一派の盲従分子たちは動揺をかくしきれません。

一言も反論できず ‘完黙’

山口市の済生会病院の鳥本某は、あさま山荘での銃撃戦の段階では「あの人たちをあのような行動にかりたてるのは社会の仕組が悪いからだ。決して責めるべきではない」といっていました。ところが、その直後にゾロゾロ虐殺死体が出てきたのにビックリ仰天。以後ピタリと口をつぐみました。

東京での福田一派の唯一の“拠点”である日航羽田にしても似たようなもので、労働者から何を聞かれても“完黙”の一手。一部のものが「春闘を政治ゼネストで闘おう」というビラをまくのが精いっぱいです。

その政治ゼネスト方針にしても、組合活動家に「政治ゼネストから武装蜂起によって国家権力を奪取する、というのは毛沢東流の武装闘争方針だ。この方針を実践に移したら『連合赤軍』と同じ道をたどることは必然じゃないか」といわれても一言も反論できないでいます。

7 西沢隆二一派——いまは責任のがれの沈黙

事件いらい表面に出ぬ西沢

「鉄砲から政権が生まれる」とことあるごとに暴力集団をケシかけておきながら、その帰結としての銃撃・虐殺事件が国民のこうごうたる非難にさらされると「あれは毛思想とは無縁」と口をぬぐう福田正義一派——。なんと人々を食った話ですが、同じ反党盲従分子、西沢隆二（ぬやま・ひろし）をリーダーとする「毛沢東思想研究会」グループの場合は、もっぱら沈黙とおおかぶりをきめこんでいます。「西沢は事件いらい、健康上の理由などをあげて表面に出たがらないし、他のメンバーも事件にふれるのをことさらさけている」——西沢一派の事情に通じた人たちが伝える近況です。

北京の態度表明を待っているのか。それともうかつに口もきけないほど、なにかのつぴきならないいわくがあるのか。

羽田事件で早くも暴力賛美

第一次羽田暴力事件(一九六七年十一月十二日)といえば、民主勢力の挑発者トロツキスト集団がはじめて大がかりに角材、こん棒を持って登場した事件。いわばこんどの銃撃・虐殺事件の“さきがけ”です。西沢隆二はこのとき、いちはやく暴力集団のこの妄動を賛美し、自分たちの機関紙でこうおだてあげたものでした。

「若い労働者や学生の隊伍の中に人民解放軍の旗のなびく日も、決して遠いことではない……。その日、若者たちは“鉄砲から政権が生まれる”という毛沢東同志の言葉の正しさを身ぶるいをもって思い起こすだろう」(『人民新聞』一九六七年十一月二十六日号)

永田洋子や坂口弘ら毛沢東思想に傾斜するトロツキストを含む各派集団が、西沢らの扇動に“身ぶるい”し、その後、角材から火炎ビン、手製爆弾……と、“武器”をエスカレートさせていったのはよく知られている通り。西沢一派の機関紙・誌はそれに輪をかけて「敵に反対されることは悪いことではなくよいことだ」「すばらしい」を連発しました。

「中核派」集団が新宿駅頭で老人や婦女子までも巻きぞえにした火炎ビン、投石騒ぎを起こせば「学生、市民連帯の街頭火炎ビン闘争」「人民ゲリラが大活躍」とたたえ、「社会学同ML派」が神田の路上で自動車を焼打ちにすれば「人民大衆と結びついた街頭バリケード闘争」と持ち上げる。“功”をあせった「革マル」がアメリカ大使館にしのびこみ、売名宣伝用のタレ幕を下げれば「愛国学生、米大使館に突入」とほめあげるといったあんばい。

米原子力空母「エンタープライズ」佐世保「寄港」に反対する世論が全国的に盛り上がった一九六八年には、「共産同」「社会学同」「日中青学共闘」メンバーを集めて座談会を開き、「非合法の軍事組織、暴力組織の必要性」を強調、今日の「連合赤軍」を示唆するような「組織のセクト性を克服した共同行動」を公然とそそのかしたものでした(『毛沢東思想研究』一九六八年三月号)。

強かった「ML派」との関係

西沢一派は、各派暴力集団の中でもとりわけ永田洋子をはじめとした「京浜安保共闘」グループの母体となった「社会学同ML派」とただならぬ関係にありました。それをはっきり証明したのが、一九六九年三月十五日、日中友好脱走派(会長・黒田寿男)内で発生した日中友好貿易の利益配分をめぐる福田一派へのなぐり込み騒ぎです。

この日、永田礼司、岡村学ら札付きの暴力分子に率いられたML派四十人は、西沢一派の両田ハル子、白西紳一郎らと徒党を組んで、「日中貿易のあがりのわけ前を東大や日大でたたかうわれわれにもっとまわせ」と、東京・神田の脱走派本部で福田一派の主導権のもとに開かれていた「常任理事会」の会場におしかけました。

永田らは「理事」の一人ひとりを“総括”にかけ、なぐるけるの乱暴のかぎり。歯を折られてうずくまるもの、いすごとあお向けにひっくり返されて気を失い、水をかけられるもの、茶わんの破片で後頭部をぶち割られるもの、逆さづりにされるもの……。「ぶち殺せ!」「おい、こいつまだ口からアワをふいていないから大丈夫だ。もう少し痛めつけてやれ!」の怒号。悲鳴。脱走派本部内は修羅場と化しました。

“総括”は翌日にまたがるえんえん十八時間も続き、その間、「理事」たちはろくに便所へも行くことを許されず監禁状態。結局、西沢一派やML派の“要求”をのんで、各友好商社から総額五百万円を集め、ML派の“軍資金”としてきょ出することを誓約しました。

暴力集団の資金集めも援助

西沢一派はこのようにトロツキスト暴力集団の資金集めにも積極的な役割を果たしていたのです。西沢自身も毛沢東への盲従ぶりがみとめられ「五同産業」という日中貿易商社を開業しています。「人民日報」や北京放送の片言隻句を金科玉条とする西沢の盲信度からすれば、かれもまたML派ほか暴力集団の

有力なスポンサーとなっていたであろうことは、想像にかたくありません。そうでなければ西沢は、口先だけの日中利権ブローカーにすぎないことになるわけです。

紙上での教唆、扇動にとどまらず、資金をめぐってもめきさしならぬつながりにあったトロツキスト集団と西沢一派との関係——。

この一派のこんどの銃撃・リンチ虐殺事件の反応が「沈黙」であるのは、至極うなずけるというもの。だが、「共犯者」としての責任はのがれられるものではありません。

8 毛沢東思想学院——“学習道場”から暴力実践へ

赤軍派やML派を援助賞揚

そのものずばり「毛沢東思想学院」——。昭和四十一年十月、西沢隆二と前後して共産党を除名された大塚有章(七五)の主宰する“学校”で、兵庫県宝塚市にあります。四十人程度が泊まり込める施設があり、土曜日から日曜日にかけて京阪神各地から学生、労働者などが集まってきます。

かれらと「連合赤軍」の関係は密接です。関西でうまれた「赤軍派」にたいし、集会会場として「学院」の建物を貸すなどの援助をする一方、永田洋子をはじめとする「京浜安保」の母体組織・ML派を「東大正門に、現代における世界革命の最高指導者毛主席の肖像をかかげ、“毛思想万歳”の赤旗と、“帝大解体”“造反有理”のスローガンを高だかと上げたのがML派」(大塚有章、かれらの雑誌『毛沢東思想』四十四年五月号)と称揚、“共闘”を組んできました。その密接な関係は、同じ盲従仲間の福田一派からさえ『連合赤軍』を生み育てた」(福田一派の機関紙「人民の星」三月十八日付)とたたかれているほどです。

延安の毛沢東を猿マネして

大塚は脱走する前、日中友好協会大阪府連の理事長で、同府連が奈良県平群村に開設した「日中友好学院」の院長でした。中国で鉄砲を撃たせてもらいすっかり感激してしまった、例の木村喜代子は、同学院の卒業生です。同学院に通っているうちに大塚に傾倒し、卒業後日中友好協会脱走派の事務所につとめ、一路盲従の道をつきすすんだのです。

平群村の「日中友好学院」は農家を改造したものでした。建物が古いのはやむをえないとして、たたみ敷きの教室にたいしカーテンでへだてた院長執務室は、薄暗い土間に木製の机、いすをならべ、“延安の毛沢東”図に似せてしつらえてありました。

大塚がかつて“新中国見学の旅”にたったとき、“中国共産党万歳”の腹巻きをして船に乗ったという話は、関係者のあいだでは有名です。

大塚は共産党を除名された当時、西沢とともに「毛沢東思想研究会」を設立、しかし一年ほどでけんか別れし、その後は「毛沢東思想学習会」なるものをつくり、「理論」「実践」の両面で盲従、反共に狂奔してきています。仲間である盲従各派はこの二派を区別して西沢一派を「毛研」、大塚一派を「毛学」と呼んでいます。

毛思想の活学活用は……暴力

青年、学生を身近に集め“塾”をつくるのが好きな大塚は「学院」を設立、京阪神各地の「正統本部」(日中友好協会脱走派)のなかから、盲従度の高い“傾向のいい者”を院生として選抜、半年一期で毛沢東思想をたたきこんできました。かれらは「学院」についてもっぱら“毛沢東思想の学習道場”と宣伝していますが、その一方では“活学活用”と称し、ML派などと組んで暴力実践に血道をあげてきたのです。表面に立った実践部隊は京阪神の種々雑多な盲従暴力学生をかき集めてつくった「学生解放戦線」「人民解放戦線」「毛沢東思想青年学生共闘会議」など。

「毛沢東思想青年学生共闘会議」の結成を伝えて、かれらの雑誌(『毛沢東思想』四十三年十一月号)は叫びます。「鉄砲から政権が生まれるという毛主席の教えを実践する実力闘争の時代に突入した」「毛沢東思想を指針とする戦闘部隊割設」「持久的、猛烈に暴力革命を実践する」——。

北京からの指示待ちと弁護

骨髓からの毛沢東盲従の大塚のこうした一連の行動が北京の意にそったものであったことはあきらか。おもしろい話があります。かれら自身が語っているのです。「……大阪入りしたばかりの中国卓球団は、多忙をきわめた日程をさいて『学院』を訪問してくれた。これにたいし『学院』では、講師や院生が三里塚などの闘争に参加して得た経験を話し、各人が“自分の階級的忠誠を保証してくれたものは毛沢東思想であった”と具体的に報告、中国の同志より熱烈な激励を受けた」(『毛沢東思想』四十六年五月号および八月号)

さて、「あさま山荘」事件とその後に発覚したリンチ殺人について、かれらはなんといっているか。公式には沈黙です。“北京待ち”。毛沢東盲従にたいする国民的な糾弾の声に押されて公然とは弁護するわけにいかず、さりとして従来の密接な関係からして、あからさまに非難するわけにもいかず——というところ。最近出た『毛沢東思想』三月号は、この問題をわずかに「編集後記」でとりあげ、「日共は『連合赤軍』の誤りに乗じて、ここぞとばかり毛沢東思想にたいする反革命キャンペーンをおこなっている」とのべています。

「連合赤軍」を生み育てたみずから犯罪的責任をタナに上げ、共産党攻撃にすりかえる卑劣な手口です。

「連合赤軍」の蛮行を“誤り”とするかれらのいい方が、「意図は正しかったが若干の行き過ぎがあった」という弁護論の一種であることは明かです。「連合赤軍」の蛮行は、もとよりたんなる“誤り”などというのではなく、毛沢東盲従の“人民戦争論”“唯武器論”の必然の帰結なのです。

周恩来は一二月二十九日に北京で、三里塚訪中団などに「日本の新左翼は立派だが政策が不十分」と明らかに「連合赤軍」事件を念頭において、トロツキスト暴力集団の賛美と、これへの援助、指導の必要性をのべ、共産党を修正主義だとののしりました。

この“指示”に勇氣百倍した大塚一派をふくむ日本の盲従分子たちが、こんごいっそう「連合赤軍」弁護と共産党攻撃に精をだすことでしょうか、その行く末がみものです。

9 日中脱走派——文章まで北京の口うつし

世間に通用しない‘無関係’

「中京安保共闘」——「連合赤軍」を名乗る一味の中で、加藤倫教とその十六歳の弟、山本順一(死亡)・保子夫婦、小嶋和子(死亡)、寺林真喜江らが以前属していた毛沢東盲従集団の一派です。「京浜安保共闘」の指導でつくられた組織ですが、この「中京安保共闘」メンバーは、そのまま「日中友好協会(正統)」をせん称する愛知県組織の会員でもありました。この毛沢東盲従グループの理不尽な攻撃をはねのけ、真の日中友好運動の旗を守りつづける日中友好協会愛知県本部の大橋満男事務局長はいいます。「新聞に加藤や山本が『正統』派の会員であったことをあばかれ、あわてた『正統本部』では、しきりと“無関係だ”といいわけしていますが、ふざけた話です。愛知県の『正統』・グループは社会党の毛沢東盲従分子黒田寿男(代議士)一派の影響下にあるわけですが、集会やデモのとき、『正統派』の旗のもとで赤ヘルメット姿の『中京安保共闘』メンバーが、反帝学評(トロツキスト)や毛沢東思想共闘戦線(大塚有章系)といっしょになってあばれまわっていたことはよく知られていること。会員としてさんざん使っておきながら、自分たちに累がおよびそうになると“なんの関係もない”では、世間には通用しません」

共産党攻撃が目的の組織

「日中友好協会(正統)」とは、中国で紅衛兵運動が荒れた一九六六年、中国の干渉グループに指導され、文化大革命の礼賛や毛沢東の絶対化、日本共産党にたいする攻撃・転覆などを目的としてつくられた盲従組織。日中友好協会から脱走した福田、西沢、大塚、安斎各派の反党盲従分子と、社会党幹部の黒田寿男、岡田春夫、穂積七郎(いずれも当時代議士)らが寄り合い、社会党のバック・アップを得ています。

一時期、友好貿易の利益配分争いやら主導権争いやらがこうじて宮崎・三好派(福田系)、黒田派、西沢派……などに四分五裂しましたが、昨年秋、中国の干渉者グループのテコ入れで“大連合”しました。

会長は黒田寿男、理事長は宮崎世民。現在、社会党、総評、社青同などがつくっている「日中国交回復国民会議」の有力な構成団体でもあります。

日中友好運動を“毛沢東盲従運動”にすりかえ、日本共産党をアメリカ帝国主義、ソ連共産党、自民党政府とならべて「四つの敵」の一つに数えるこの団体は、さながら“連合盲従集団”です。かれらがいうことは、ことばづかいから文章まで人民日報や北京放送の口うつしです。「革命暴力はよいことだ」「情勢はすばらしい」と、トロツキストの妄動をケシかけ、“共闘”してきた“実績”では人後におちません。

そのおもなものをひろっただけでも――。

日中友好協会本部襲撃事件(一九六七年)――紅衛兵の本場での“武闘”を直輸入して「正統」本部会員、在日華僑学生、トロツキストML集団が東京・文京区善隣学生会館内にある日中友好協会本部を同年二月いらい百五十回にわたって襲撃。竹やり、鉄パイプ、先のとがった鉄ヤスリなどの凶器を振りまわし、ひとかかえもあるコンクリート破片を投げつけるなどして協会勤務員など二百八十人に重軽傷を負わせました。

「連合赤軍」メンバーの山本順一は、この襲撃の先頭にたった一人。

民主勢力のきびしい追及、糾弾をうけて当時四分五裂し、氣息えんえんとしていたトロツキストは、この事件以後急に息を吹き返すことになりました。

羽田暴力事件(一九六七年)――十月八日、佐藤首相の「南ベトナム訪問実力阻止」を呼号、トロツキスト各派と共同行動し、「日中脱走派」の会員六百人が参加。暴力事件のなかで死亡した山崎博昭をたたえ、その「追悼中央葬」なるものまでトロツキスト各派と共催。

東大事件(一九六九年)――一月十五日、工学部列品館にたてこもったML集団に加わり、「脱走派」の有カメンバー永田礼司、藤井広朋らが相次いで逮捕されました。永田は神奈川県「脱走派」本部事務局長の経歴をもち、ML集団を背後からあやつっていた黒幕の一人。その私宅の家宅捜索ではダイナマイトや手製ボール爆弾、劇薬など危険物とともに、大量の麻薬やインドネシア紙幣、ゲリラ戦術教典が発見され、疑惑をよびました。

札幌爆弾事件(一九七一年)――10・21の夜、北大正門前で爆弾を投げつけて逮捕された高校生らの供述から、爆弾の製造は同市南九西六の日中友好「脱走派」本部札幌地区本部の一室に、塩素酸ソーダ、硫黄などの薬品と、ポスターカラーのあきビンを持ち寄っておこなわれていたことが発覚しました。

暴力集団に「救援資金」も

見のがすことのできないことは、こうした妄動が特定個人の偶発的な発作ではないことです。それは「脱走派」本部ぐるみのものでした。東大事件直後に開かれたかれらの全国理事会(六九年二月二日)では、会長の黒田寿男が「東大闘争で学生諸君は“造反有理”(むほんには道理がある)のスローガン」を大きくかかげている。学生運動のなかに毛沢東思想が浸透しつつあると、「安田講堂攻防戦」を絶賛。「愛国正義のたたかい」とおだてあげて、暴力集団への“救援資金”パイプ組織として「日中救援センター」の設置まできめました。

ところがこの“連合盲従集団”、なにを血迷ったのか、正真正銘自分たちの“申し子”である「連合赤軍」一味が、毛沢東思想を“発展”させた銃撃・リンチ虐殺事件をひきおこすと、機関紙「日本と中国」紙上で、「日本のトロツキズム(「連合赤軍」)宮本集団(日本共産党)が生みだした鬼ツ子」(三月六日付)などと、右翼謀略団体「勝共連合」と同様のデマ宣伝をはじめました。だがこれは少々早まりすぎたようです。親の心子知らずか、子の心親知らずか、海の向こうのご本家で周恩来は「日本の新左翼(毛盲従、トロツキスト暴力集団のこと)は立派である」とのべたのです。毛沢東盲従の「脱走派」の面々、どうつじつまを合わせるつもりか、見ものでしょう。

10「京浜安保共闘」――雑多な狂信分子が野合

武装闘争けしかけにこたえ

「連合赤軍」一味があさま山荘でうちまくった銃器――ライフル一丁、猟銃四丁、ピストル一丁。かれらはこれをどこから手に入れたのでしょうか。

ライフルは「赤軍派」の野津加寿恵が兄の家から盗み出し、ピストルは「京浜安保共闘」のシンパ中野文雄が昨年フィリピンから密輸入して同派にまわしたものだ。では四丁の猟銃は——。うち三丁はよく知られているように「人民遊撃隊」を自称する「京浜安保共闘」の中島衡平、尾崎康夫らが昨年二月、栃木県真岡市の塚田銃砲店に押し入り、店主夫婦をしばりあげて強奪したものです。同派はこれよりさき、七〇年十二月には、渡辺正則、柴野春彦らが警官のピストルを奪おうとして東京・板橋の上赤塚派出所を襲撃しています。

かれらは、これらの強盗行為を「鉄砲から政権が生まれる」「人民の軍隊がなければ人民のすべてはない」という「人民戦争万能論」にもとづく「建軍武装闘争」といい、「毛主席の呼びかけに応えたもの」で「日本人民がはじめてその手に鉄砲を握りしめた偉大な闘い」とうそぶいています。

「毛主席のよびかけ」とは、毛沢東が一九七〇年五月二十日に発表した声明で「小国の人民も、武器をとって敢然として立ちあがり武装闘争を堅持しさえすれば米帝国主義とその手先を必ず打ち破ることができる」と武装闘争をけしかけたことをいいます。

派出所襲撃事件の犯人、渡辺はさる三月十八日の公判で「毛沢東思想は現代マルクス・レーニン思想の最高峰である」とのべ、相変わらずの毛沢東盲従ぶりをしめしていました。

「連合赤軍」も元のメンバー

この毛沢東盲従集団・「京浜安保共闘」が世に知られたのは、一九六九年九月の愛知外相の訪ソ訪米のとき。羽田空港の滑走路に侵入、火炎ビンを投げ五人がつかまりました。「反米愛国」「毛沢東思想万歳」と書いた赤旗をもっていました。

その結成は、かれらの発行した文書によると同年八月としています。上部団体として「日本共産党(革命左派)神奈川県委員会」なるものをいただくその組織は、京浜地域の「学生戦闘団」(東京水産大、横浜国大、神奈川大、関東学院大など)、「京浜労働者反戦団」、「婦人解放同盟」、「反戦平和婦人の会」などによって構成されています。しかし、実体はシンパを含め約百五十人の団体異名の単一組織。

その源流をたどると——。

一九六七年春、トロツキストML派を脱退した横浜国大の新井功(殺された加藤能敬らを組織し「中京安保共闘」をつくった男)、同大と交流のあった東京水産大の川島豪、坂口弘らのグループがYF(「反帝平和青年戦線」)なる組織を結成しました。毛沢東盲従の独自の綱領、規約をもつこの組織は、おりからの紅衛兵運動の最盛期のなかで、中核派(横浜国大)やブンド系の共産主義学生戦線(東水大)にあきたらない雑多な反共暴力分子をある程度結集するのに成功しました。

これが、「京浜安保共闘」、つまり「(革命左派)神奈川県委員会」の前身であり母体です。

今回の「連合赤軍」事件の関係者のうち、吉野雅邦(横浜国大)、寺岡恒一(同、死亡)、金子みちよ(同、死亡)、大槻節子(同、死亡)、杉崎ミサ子(同)、坂口弘(東京水産大)らはもちろん、渡辺正則(横浜国大、交番襲撃)、柴野春彦(同、同、死亡)、雪野健作(同、猟銃強奪)、中島衡平(東京水産大、同)ら京浜安保共闘のほとんどがYFのメンバーでした。YFは一九六九年春には「(革命左派)神奈川県委」を結成、同時に「学生戦闘団」を名乗り学園から姿を消し、坂口ら一部は職場にはいって「労働者戦闘団」を組織、女性活動家は「婦人解放同盟」をつくります。

もっとも狂信的な毛沢東盲従集団もそのもとをたぐれば、「赤軍派」と固じブンド系のトロツキストML派というわけです。

毛語録の片言隻句を真理に

他派のトロツキストから「毛・林派」とさげすまれたML派脱退組とはいえ、トロツキストがなぜ毛沢東盲従集団に変身したのか。

一九六七年といえば、中国で紅衛兵が大さわぎをしていた時期。安保闘争後、国民から見離され、四分五裂して意気消沈していたトロツキストは、「造反有理」のスローガンをかけ、手あたりしだいの乱暴を働いた紅衛兵運動に触発され、その一部は急速に毛沢東盲従に変わっていったのです。

東京水産大、横浜国大などのML派は、善隣学生会館事件(一九六七年二～三月)では、日中脱走派

造反団を名乗り、望月登、永田礼司ら神奈川の反党盲従分子たちとともに日中友好協会本部襲撃に参加しています。

さらに、毛沢東一派が日本の革命運動、民主運動に押しつけてきた「毛沢東思想」の絶対化は、毛沢東の片言隻句を無条件の真理とする単純なもの。その反日本共産党の立場とあいまって、トロツキスト学生の単純な頭脳にもっとも受け入れやすいものだったといえます。

11「赤軍派」——ハイジャックを周恩来にほめられ、感激

中国人民解放軍紙をまねる

山岳アジトに結集した二十九人の「連合赤軍」のうち十九人がトロツキスト「ML派」から毛沢東盲従集団へ変身した「京浜安保共闘」。残る十人がトロツキスト共産同赤軍派から毛沢東盲従集団へ転身した「赤軍」派の一部です。「赤軍派」出身者の中心は「連合赤軍」の指揮官、森恒夫(二七)、「坂東軍団」といわれて金融強盗に悪名をはせた強盗の頭目、坂東国夫(二五)、リンチで最後に殺された山田孝(二七)。

「赤軍」——こんなことばが聞かれはじめたのは一九六九年五月ごろ。この年も前年にひきつづき東大闘争、それにつづく四・二八沖縄統一行動など、国民的なたたかいが大きく盛りあがりました。このなかで、ゲバ棒、投石、火炎ビンなどで機動隊と衝突し、共産党や民主勢力の統一行動破壊に狂奔していた各派のトロツキスト暴力集団。なかでも共産同系の暴力集団、五人組の軍隊組織・「共産主義突撃隊」のなかで「赤軍」という機関紙が配布されました。この「共産主義突撃隊」は、当時共産同の一分派だった「赤軍派」一味が中心になって各地区ごとにつくったもの。この各地区の突撃隊員に「10・21、4・28闘争は軍事的敗北。早急に軍隊を組織し武装蜂起しなくてはならない」というかれらの「前段階武装蜂起」論が初めて提起されました。かれら自身が『世界革命戦争への飛躍』という本のなかで、「中国人民解放軍の軍機関紙をまねて機関紙“赤軍”をつくった」といっているように、このときからすでに毛沢東盲従のきざしがみえていました。しかし、かれらは思うように「隊員」があつまらず、そのごの闘争で全国動員をしては、このなかから恒常的に東京で活動する「中央突撃隊員＝赤軍親衛隊」を志願兵として徴兵しました。

「武装蜂起」だと突撃隊結成

また、前年の第一次、第二次羽田事件や一月の東大闘争で逮捕された暴力学生がつぎつぎと保釈で出てきたのもこのころ。保釈されたばかりの暴力学生への「赤軍派」によるオルグが強力におこなわれました。東大・安田講堂占拠事件で逮捕、起訴された社会学部二十七人中、十九人が「赤軍派」に移りました。その他「中核派」や全共闘系・ノンポリの暴力学生も組織して、一時期は四百人近い勢力にふくれあがったといえます。

これを指導したのが、当時は共産同書記長の塩見孝也(三〇)。一九六九年五月、共産同から除名された塩見ら“関西派”は、この突撃隊を中心に、八月正式に「共産同赤軍派」を結成。塩見は、その政治局議長にすわりました。当時、塩見らは「毛沢東、ゲバラなどのレーニン死後の実践・理論をわれわれの実践のなかから統一した。さあ武装蜂起だ」と叫び、約百五十人の中央突撃隊をつくりました。この突撃隊が赤軍中央軍。まず、かれらの拠点、大阪で九月に“大阪戦争”を宣言して交番を襲撃しました。そのご、決死隊による首相官邸占拠などの目的で五十三人の幹部要員を大菩薩峠の“福ちゃん荘”にあつめ軍事訓練をしている最中に、警察に踏みこまれ全員逮捕されました。

これに参加しないで逮捕をまぬがれた塩見は、日本では軍事訓練ができないとして“世界同時革命——国外根拠地建設”を主張。“軍事訓練”をうけるためにキューバに国外根拠地をつくるという「フェニックス作戦＝よど号乗とり計画」を七〇年一月の中央委員会で決めました。この会議で、作戦遂行のための最高指導部「フェニックス委員会」が塩見、田宮高磨(二七)、小西隆裕(二五)らによってつくられました。そのご、この委員会の指導で空港調査や武器調達、資金調達がおこなわれました。作家の大藪春彦氏宅を襲ってけん銃などの武器を奪うアンタッチャブル作戦、葛飾区青砥のスーパーマーケットや京都市のキャバレー“カジノ”に強盗に押しいるマフィア作戦などが実施されましたがいずれも失敗におわっています。

また、中央委員前田、上原が塩見の指示で中大生の共産同叛旗派暴力学生足立某に「資金三十万円を準備しているのでハジキ五丁とヤツパ(日本刀)十五丁を都合してくれ」と依頼。足立は、極東組に顔のきく暴力団員に「学生運動でゴタゴタがあるのでケリをつけるために日本刀がほしい。十五本くらい都合してくれ」と頼みました。この暴力団員は東京・上野のアメ横で「演劇に使用する」といって日本刀や短刀の模造品十五本を六万三千五百円で買い「真剣だが刃どめをしてある」と足立の目の前でヤスリ、グラインダー、と石などで刃をたて、サラダオイルでサビどめして渡したといえます。

「よど号」のつとりにはこのニセの日本刀が使われました。日本国民を憤激させたこのハイジャックにたいして、かねてからトロツキストを支持、激励していた中国は、こんどは、周恩来じきじきに「すばらしいこと」と「赤軍派」を称賛しました。これに感激したのか、塩見は、そのご「毛沢東と中国共産党はマルクス・レーニン主義を継続発展させた、過渡期世界の革命的創業者であり、毛沢東主義はとどまるところを知らず発展しつつある」(大菩薩峠公判での所信表明)と毛沢東をほめたたえて自称の“日本のレーニン”から“日本の毛沢東”にみごとに変身しました。

大菩薩峠での軍事訓練や「よど号」のつとり事件で幹部の大半を逮捕された「赤軍派」は、そのご森らの指導で、強盗、かっぱらいのM作戦や爆弾闘争をくりひろげ、同じ毛沢東盲従の「京浜安保共闘」へ、急速に接近していったのです。

12 資金のナゾ——カギは中国貿易商社

‘M作戦’だけでは大「赤字」

「あんなたくさんのお金どこから手にいれたんでしょう。生活がやっとの私たちには思いもよらない大金です」(南軽井沢の主婦伊藤まさ子さん)——連合赤軍一味が逮捕されたとき所持していた金は、一般庶民がびっくりするほどばく大なものでした。

警察につかまったとき、森恒夫が三百四十三万円、永田洋子が四十六万円をポケットに無造作にねじこんでいました。「あさま山荘」に逃げこんだ坂口弘ら五人が七十五万円……。現金だけで合計六百万円をうわまわりました。

一味の資金調達法の一つは一連の金融機関を襲う「M作戦」。「我われは大いに犯罪を犯すべきである」「銀行から強制収奪することが人民に損害を与えるものでないことは明らか」と呼号して昨年二月から「武装蜂起」の前段階として千葉県下の三つの郵便局、仙台郊外の振興相互銀行黒松支店、横浜の横浜銀行相武台支店、米子の松江銀行米子支店など金融機関をあいついでおそいました。あげくのはては横浜で小学校職員の給料三百二十万円を自昼ひったくり、東京では夜陰に乗じて女性のハンドバッグをひったくる辻強盗までやってきました。

ところでこの一連の「M作戦」で一味が入手した金は千三百万円余。米子事件はすぐつかまり、六百万円が回収されたので手もとに残ったのは七百万円あまり。そして一味が逮捕されたとき所持していた“現ナマ”は六百万円。使った金は百万円という勘定です。

しかしこれで一年間の逃走生活がまかなえるはずはありません。「赤軍派」、「京浜安保共闘」の連合の動き(昨年一月)からこの一年数カ月の間、真岡の銃砲店襲撃事件だけみても長野—新潟—秋田—札幌—東京—群馬と、かれらは逃げまわっています。そして丹沢アジトにはじまり、群馬上毛山中にいたる山岳アジト建設費、二十カ所をこえる都市アジト設営費、潜行のための旅費、生活費……。この間、一味の動かした金は一千万円をこえると推計されています。かれらの資金源が「M作戦」だけだとすると、大「赤字」です。しかし一味は、金に不自由していた様子はありません。

かれらの資金源には、どうしても「M作戦」以外のルートも考えられてきます。

第一に警察庁富田警備局長も認めている警察からの泳がせ資金、第二に一部の学者、文化人からのカンパ。第三に一味が“兵士のための肉体訓練”と称する土木工事や港湾荷役などでえた賃金からの上納金。第四に大口資金カンパ。

青砥らがすでに一部自供

「M作戦」だけでは赤字。第一から第三までは、それぞれ相当額になるにしても一千万円には到底なら

ないでしょう。問題なのはなぞにつつまれた第四の大口資金カンパ。

青砥幹夫らがそのナゾの一部を自供しはじめています。「京浜安保共闘」の永田らが、同じグループの“女闘士”が都内の一部の日中貿易商社の社長とねんごろになったことをネタにその社長をおどしてひき出してきたといいます。前沢虎義も昨年から永田を中心にこうした貿易商社から多額な資金をえていたことを自供しています。

日中貿易筋に明るいN氏はこういいます。

「おどかしたの、おどかされたのという仲じゃありませんよ。毛沢東に土下座して大もうけしている盲従商社と毛沢東思想の旗をかかげつつばしる『連合赤軍』は同じ穴のムジナですからね」

毛沢東盲従の西沢隆二らの五同産業、長谷川敏三の呉山貿易、津々良渉の五洋貿易、大武旭の大竹貿易、高橋庄五郎の高庄など永田らが足しげくかよいそうな盲従商社はいくらでもありとN氏は指摘します。

こうした盲従商社が支配権を握っているのが国際貿易促進協会。この事務局は「京浜安保共闘」のメンバーがそうであるように、元トロツキスト集団「ML派」くずれが牛耳り、川島豪、永田洋子ら「京浜安保共闘」の幹部とひとかたならぬ関係にあったといわれます。例の「あさま山荘針撃戦」がはじまった二月十九日、東京の国電御茶ノ水、池袋駅頭で背広を着こんだ会社員風の男が「連合赤軍を支援しよう」などといいながらカンパ活動をしていました。この背広男が盲従商社員。「連合赤軍」一味の潤沢な資金の秘密をとくカギはここにありそうです。

財界からも流れた資金

毛沢東盲従商社はかねてから暴力集団の資金源でした。六九年三月に日中脱走派が大分裂したきっかけのいわゆる三・一五テロ事件も、主流派の黒田寿男らが「ML派」など暴力集団へのカンパをしぶり友好商社が「四十億円の配慮物資を中国からもらって儲けている」(脱走派の機関紙「日本と中国」)のに“わけまえ”をあまりまわさなかったことが原因。脱走派は同年の「東大闘争」、前年の羽田事件でつかまった暴力集団のために「救援センター」をつくり、商社に「犠牲者にたいする救援カンパのご協力をお願い」なる「回状」をまわし、五百万円をあつめて「ML派」などトロツキスト集団に“献金”しました。

一味の資金については警察ではほぼ解明しているようですが、銀行強盗、ぴったくりなどはっきりしたもののほか、なぜか大口資金を提供していたとみられる盲従商社との関係には口をつぐんだまま。「なんとか中国と接触したいとアヒルの足をバタバタしている自民党政府、中国に乗りこもうとしている大企業にとって、うまくない材料になるからだ」(国貿促消息筋)という見方が有力です。

さらに解明されなければならないのは、一味と財界との関係。二年前の「よど」号ハイジャック事件の資金として百万円あまりを関西財界人が出していた事実もあり、今回、相当の資金が流れていたことも想像にかたくありません。

13 うごめく残党——動揺、そして開き直る

「革命烈士の碑を」……

「階級闘争の犠牲となったかれら革命烈士の悲哀を刻印として秘めるのみならず、われわれの胸のうちを共同墓碑として具体化したいと考えます」——「あさま山荘」事件から一カ月あまりたった三月三十一日、「連合赤軍」を名のる毛沢東盲従集団の“公然部隊”、「日本赤色救援会」なるものが東京で集会をひらき、こうさげびました。火つけ、強盗、殺人……ありとあらゆる反社会的犯罪をくりかえし、あげくのはてに“仲間”どうしのせい惨な殺しあいをした連中のために“胸のうち”ばかりか、実際に「碑」を建立するといい、そのために、土地を提供してくれ、カンパもしてくれともいいます。いったいだれに向かっているのか。これまで一味をはげましつづけ身内のように扱い、つい先ごろもかれらを含む「新左翼は立派だ」ともち上げた周恩来からその「正しい指導」を強調された戸村一作、岡田春夫など種々雑多な盲従集団にでもたのみこもうというのか。

二年前の「よど」号ハイジャック事件二周年と銘うったこの集会には「赤軍派」や「京浜安保共闘」、「ブンドさらぎ派」などの徒党、百五十人あまりが集まりました。盲従集団にたいする世論のきびしい糾弾のな

かで、さすがに集まった連中におののきの色はかくせません。壇上からのアジ演説にもおしころしたような拍手だけ。

泣き出さんばかりの調子で

「あさま山荘」で“銃撃戦”が開始された当初には東京、京都で「銃撃戦支援集会」をひらき、「連合赤軍に呼応を」「軽井沢へ」などと氣勢をあげていたものでした。さらに虐殺事件についても、山田孝の死体が発掘された段階までは「武闘を本格的にやろうとする集団にスパイがいれば殺すのは当然だ」とうそぶいていたものでした。

ところが金子みちよ、山崎順、加藤能敬……とあいついで虐殺死体が掘り出され、目をおおうリンチの実態が明るみに出てくると、かれらのなかにも動揺がいきなり広がりました。「事実関係を明らかにするにとどまらず……総括へと発展させられねばならないがかなり長期にわたる苦しい作業であることが予想される」(「赤色救援会」声明、三月十一日)と。

「赤軍派」の「政治局員」を名のる川島豪にいたっては「たまらなく悲しく、さびしいのだ」と、刑務所のなかからまさに泣き出さんばかりの調子でした。これに応じて、京大文学部新館前にたてられていた「連合赤軍は人民の宝である」と大書した看板はいつのまにか消え、東京、大阪、京都で「連合赤軍支援」を叫んでいた残党もピタリと口をつぐみ、なかには下宿先にもいたたまれなくなった連中もいます。

森・永田に責任なすりつけ

ところが、どこからてこ入れがあったのか、一二月三十一日の集会で一味の幹部は「味方内部に広はん動揺が起っているが、我々はこの動揺をおし隠す必要はない」とひらきなおりました。そして「自己批判から出発する」「教訓の血肉化作業をいそがねばならない」とくりかえしのべ「連合赤軍によって発せられた銃声は我々を大いに勇気づけ、敵を恐怖に陥れ混乱させ」「日本革命戦争を大きく前進させた」などとさげびちりました。さらに声をはりあげ「『鉄砲から政権が生まれる』という革命の鉄則を繰り返し確認しよう」「毛沢東思想を高くかかげ人民遊撃戦争の大道を前進しよう」と叫んだものです。

それでも集まってきた一味の動揺を静められないとみたのでしょうか。大量虐殺事件は「軍事のみに走り、政治をわすれた結果」であり、「人民内部の矛盾」を「団結、批判、大団結」の“大原則”で処理するという毛沢東の“おしえ”にそむいて「閉鎖的、固定的、独善的に処理した」ことによるとのべ、名ざして森恒夫と永田洋子をやり玉にあげ、責任をなすりつけるしまつでした。

だが森、永田らを中心とした「連合赤軍」一味の一連の犯行、集団リンチは毛沢東の一言一句を金科玉条にして“実践”してみせた当然のいきつく先であり、直線でつながっています。現に金融機関襲撃M作戦でつかまり、森を“批判”していた藤沼貞吉は「おれが外にいたら殺す側にまわっていたろう」ともらしていることから明らかです。森、永田らを「あさま山荘銃撃戦」のときは「革命的」ともちあげ、大量虐殺事件が明らかになると、一ヵ月もたたないうちに「反革命」と手のひらをかえし“悪玉”にしたてあげ、ショックからさめやらぬかれらの“兵士”や一味の雷同者をなんとかつなぎとめようとしているのです。

爆弾闘争の画策つづく

だがこの「獄中幹部」の珍妙な理屈も実は中国からの直輸入。「文化大革命」の際、毛沢東から「最初のマルクス・レーニン主義的大字報」を書いたとしてほめ上げられて紅衛兵運動の中心になり、北京大学教員から北京市革命委員会副主任へと「文化大革命の花形」にのしあがった聶元梓がわずか一年後に同じ毛沢東からその地位を追われました(一九六七年)。そればかりか、「一貫して毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ、もっとも確固として、守ってきた」人物として毛沢東の「後継者」にされてきた林彪までもが、いまや「劉少奇のたぐいのペテン師」とされ、生死のほども明らかでないという状態です。日本の毛沢東盲従集団のサルまねも驚くに当たりません。

こうして一味の残党はいま、あの手、この手をろうして衝撃をはらいのけ、またぞろ動き出そうと画策しています。東京、京都、大阪など各地で一味の残党は集会をひらき「密集地でのテロ、破壊、爆弾闘争をなんらちゅうちょもなく実現せよ」「武器を手にいっそう陣営を強化せよ」と叫んでいます。

関西の「赤軍派」は兵庫・丹波山中で新型爆弾実験をやり、「連合赤軍」事件に批判的なことをいっているトロツキスト「中核派」もそこから何キロとはなれていない大阪・能勢山中で「武装遊撃隊」の「軍事合宿」をしています。“烈士の碑”建立や逮捕された一味の“救援”活動なども、陰に陽につづけられています。

その際、見のがすことができないのは、かれらのこうしたしゅん動も、また毛沢東の片言隻句をつづり合わせることでつじつまを合わせていることです。

14 共産党は糾弾する——根源の「毛沢東思想」にメス

一貫して根絶を主張

これまでみてきたように、「連合赤軍」を名のる毛沢東盲従の暴力集団がひきおこした今回の事件は、毛沢東盲従路線、トロツキストの路線のいきつくところが、まさに“鉄砲プラス虐殺”であったことを万人の前にしめました。

それだけにこの事件は、トロツキストなどの暴力集団を「泳がせ」てきた政府、自民党の重大な責任をはじめ、かれらを甘やかし、あるいはけしかけてきた一部の文化人や政治家の責任、興味本位の扱い、あるいは事件の中心点をさけてきた一般報道機関の姿勢、さらには各政党の態度など、さまざまな問題を国民の前になげかけました。

デマを職業とする「勝共連合」や自民党の荒船代議士などは、ここぞとばかり、この事件を日本共産党とむすびつけようとしています。しかし、日本共産党こそが一貫して暴力集団を糾弾し、それらの根絶をめざしてきた政党であることは、故意に事実をねじまげようとしているもの以外はだれでも認めているものです。

たとえば、世間では「反共評論家」で通っている細川隆元氏でさえも、三月十九日のTBS「時事放談」で、前総評議長の太田薫氏と対談してつぎのようにのべています。

細川:この問題(暴力集団への態度)について、共産党はうまい。いままでずっと批判してきた。社会党はもたもたしている。

太田:(うなずいて)わたしは、すでに東大闘争のときに、かれらにたいする態度をはっきりさせておかねば、将来たいへんなことになるかと予言した。そのとき江田がかれらを公然と支持したのだ。

細川:その点、共産党はきびしい。点数をあげている。

トロツキスト暴力集団が最初に暴力的妄動をはじめたのは一九五九～六〇年にかけての安保闘争。このときかれらは、共産党など民主勢力を「日和見主義」とひぼうし、自分たちを安保反対勢力のようにみせかけながら、実は裏で警視庁幹部や反共右翼の田中清玄と連絡をとって国会突入などの妄動をくりかえしたのです。

この最初のときから、日本共産党はかれらの蛮行を糾弾し、その正体をあばいてきました。

「(トロツキスト暴力集団は)国際共産主義運動と日本共産党の破壊を綱領とする反革命挑発者であり、民主勢力の中に送りこまれた敵の手先である」

一九六〇年一月に開かれた日本共産党中央委員会総会決定はこのようにのべているのです。この共産党の立場は、六七年の羽田事件、六八年の佐世保事件、六九年の大学闘争、七〇年の種々の妄動、七一年の沖縄闘争などにさいしても、一貫して堅持されてきました。これは社会党が一時期、トロツキスト暴力集団を「同盟軍」(一九六八年、井岡大治元国民運動局長)と規定したりして動揺したのと対照的です。

終始批判した唯一の政党

また「鉄砲から政権がうまれる」などという毛沢東の「人民戦争万能」論、「唯武器」論を批判し、毛沢東盲従分子と終始一貫してただかつてきたのも、日本の政党のなかでは共産党だけでした。

「連合赤軍」が、トロツキスト「ML派」から分かれた「京浜安保共闘」と「赤軍派」とが「毛沢東思想」を共通の旗にして合体された毛沢東盲従集団であったことは、かれら自身の語っていること。かれらは梅のむこうの毛沢東一派からの激励のもとに、毛沢東の一言一句を盲信し、毛沢東が指導した紅衛兵運動を

サルまねし、鉄砲にかけ、仲間同士の殺し合いをやり、自滅の道をつっ走ってきたのです。

いまでは、羽仁五郎など一部の無責任な連中をのぞいて、だれもが、「連合赤軍」の蛮行を非難しています。このなかでとくに日本共産党は、かれらの蛮行の背後にある「毛沢東思想」にまで奥深くメスを入れ、政府・自民党の泳がせ政策の糾弾とあわせ、その絶滅の方向をさしめしてきました。

自主独立の立場を堅持し奮闘

三月十日に発表された日本共産党の榊書記局員談話は、つぎのようにのべています。

「わが党は、外国勢力の干渉およびそれへの盲従とたたかい、自主独立の立場を堅持して、国民多数の総意にもとづく政治革新のために全力をつくすものである。わが党は、『連合赤軍』のたぐいの盲従・暴力集団を粉碎し、その妄動と蛮行を根絶するため、ひきつづき国民とともに奮闘する」